



ドキュメンテーションを 深める

神奈川県私立幼稚園連合会特別研究A部会

2021. 1. 22

東京家政大学

佐藤康富



1

今日の流れ

- ① 今回の部会について 難波先生
- ② ドキュメンテーションの分かち合い
- ③ ドキュメンテーションを分かち合っの感想
- ④ よりよいドキュメンテーションのために 佐藤
- ⑤ 自分のドキュメンテーションをよりよくするための方略
- ⑥ 今年度の振り返りと次年度へ向けて
- ⑦ 最後の挨拶 難波先生



2

1. ドキュメンテーションの分かち合い

- グループで自分の書いてきたドキュメンテーションについて話す。



どんなことを伝えたいか。
どんな点に苦労したか。
etc

3

2. ドキュメンテーションを考える

- 分かち合いを通して、ドキュメンテーションで大切なことはなにか。



4

3. よりよいドキュメンテーションとは

ドキュメンテーションは3つに分類できる。

- ① 事実報告型
- ② 保育者の意図明確型
- ③ 保育者・子ども双方向型



5

① 事実報告型

・保育の事実について丁寧に記述する。しかし、あまり子どもの思いは出てこない。客観的出来事中心。

凧揚げあそび(4歳児)

1月お正月遊びの一環として凧作りのコーナーを設置した。

多くの子どもが興味を示し、寒い中、風とともに走って、凧揚げ遊びを楽しんでいた。



6

②保育者の意図明確型

- なぜ、このような保育・環境構成をしたかについての保育者の意図が明確に述べられている。また、その効果についても言及されている。

凧揚げあそび(4歳児)

1月お正月遊びの一環として、子どもたち自身が工夫できるような様々な素材を準備した。

自分で制作した凧を飛ばした後、振り返りの時間を設けたことで、子どもが次にこうしたいという意見をいい、それを次につなげたことで、さらに遊びが広がった。



7

③保育者・子ども双方向型

- 子ども達が環境と関わり、問題にぶつかり、より高い目標をもち、乗り越える援助をしていることが描かれている。
- 環境が意味あるものになる。

凧揚げあそび(4歳児)

年長の凧揚げを見て作りたくなった子どもたちに環境を用意する。

自分達で作った凧がクルクル回ることから、Aちゃんがしっぽを付けることを思いつく。

子どもの発見や気づき
思いや工夫が伝わる



意外性や
創造性や
思いやり

子ども達と室内や園庭で遊んでいるうちに、Bちゃんが風に向かって走ると上手く飛ぶこと発見して教えた。

8

なぜ、保育者と子どもの双方向性が



<環境による保育>

- 子どもが能動性を発揮し、主体的に環境とかかわることによって学ぶからです。
- 子どもが物や人とかかわり、対話し、自分にとっての新たな意味を見出すことが学びです。
- いかえれば、子ども一人ひとりが**環境とかかわり、課題を見出し、新たにチャレンジし、環境をどう変化させるのかという主体的なプロセス**が子どもの探究、学びであり、**自らの課題に立ち向かう姿勢や意欲を育む**のです。
- その**プロセスを描くことが真のドキュメンテーション**といえます。

9

手の倫理 伊藤亜紗



(さわる／ふれる の違い)

「ふれる」は人間的なかわり、「さわる」は物的なかわり、ということになるでしょう。そこにいのちをいつくしむような人間的なかわりがある場合には、それは「ふれる」であり、おのずと「ふれ合い」に通じていきます。逆に、物としての特徴を確認したり、味わったりするときには、そこに相互性は生まれず、ただの「さわる」にとどまります。

10

ふれることの重要性からフレーベルの恩物へ

フレーベルが何より大切にしたのは、子どもが身の回りの石や木を手に取り、それをさまざまな仕方で動かしながら、しだいにその性質を理解していく過程でした。(中略)

彼が開発した恩物も、重要なのは、目で見てわかる幾何学的な形ではなく、実際に手にとって遊ぶことによってわかる、さまざまな性質でした。(中略)

興味深いのは、こうして石や木、物の性質を知っていくことが、フレーベルにおいては、「自分自身を知ること」へと折り返されていく点です。ものの意外な性質が引き出されることと、自分の中の意外な性質が引き出されることは、フレーベルにとってセットになった一つの出来事なのです。

11

一人の中にある無限

一人の人が持つ多様性は、実際にその人と関わってみないと、見えてこないものです。一緒にご飯を食べたり、ゲームをしたり、映画を見に行ったりするふつうの人付き合いのなかで、「〇〇の障害者」という最初の印象が、しだいに相対化されてくる。フレーベルの恩物が、実際に手にとって回してみることによって初めて、立方体という見た目の形とは違う「円柱」という性質をあらわにしたように、人も、関わりのなかでさまざまな顔を見せるものです。人と人のあいだの多様性を強調することは、むしろこうした一人の人のなかの無限の可能性を見えにくくしてしまう危険性を持っています。

12

このことは、裏を返せば、「目の前にいるこの人には、必ず自分には見えていない側面がある」という前提で人と接する必要があるということでしょう。**それは配慮というよりむしろ敬意の問題です。**

いま自分に見えているのとは違う顔を持っているかもしれない。この人は、変わるのかもしれない。変身するのかもしれない。いつでも「思っていたのと違うかもしれない」可能性を確保しておくことこそ、重要なのではないかとと思います。

13

③保育者・

子ども双方向型

- 子ども達が環境と関わり、問題にぶつかり、より高い目標をもち、乗り越える援助をしていることが描かれている。
- 環境が意味あるものになる。

意外性や
創造性や
思いやり

凧揚げあそび(4歳児)

年長の凧揚げを見て作りたくなった子どもたちに環境を用意する。

自分達で作った凧がクルクル回ることから、**Aちゃんがしっぽを付けることを思いつく。**

子どもの発見や気づき
思いや工夫が伝わる



子ども達と室内や園庭で遊んでいるうちに、**Bちゃんが風に向かって走ると上手く飛ぶこと発見して教えた。**

14

保育とは、子どもの学びに気づき、認め、励ますこと

- ・子どもにどんな活動を計画し提供しようか、それができるか、できないかではなく、子どもの一人一人の活動がどんな意味を持っているのかを看取り、励ますことが大切では。
- ・子どもは興味・関心を持っていること→熱中し→チャレンジし→意欲をもって困難に立ち向かう姿勢・学びを育てる

15

この研修で大事なことはドキュメンテーションの良し悪しの評価はでない

<多様な目で、子どもの育ちを捉えるレンズを磨くこと>

- ・保育園での働き手の能力や知識は、あくまでも過渡的なものとして、子どもたち、同僚たち、親たちとの共同の実践のなかでだんだんと豊かに培われていくものと理解することが必要です。(中略)保育者はそこから学ぶものでなければなりません。(中略)保育園が内蔵する知は、ですから、そこに勤務する教職員の知のことではありません。もちろん、親の知識でも子どもの知識でもありません。そうした諸々の知の相互浸透から、それは生まれるのです。

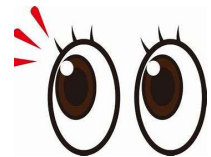
「レヅジョ・エミリアと対話しながら」 カリア・リナルディ 2019年



16

虫の目、鳥の目、トンボの目を保育に生かす

- 光を当てれば必ず影ができる。
- research・・・再び探し求める＝研究
- 虫の目・・・小さな事実と向き合う。
- 鳥の目・・・俯瞰して考える。
- トンボの目・・・様々な角度から考える。



17

子どもにとってのドキュメンテーションの意味

<保育者がドキュメンテーションを書くことによって>

僕たち(子ども)の行動を掘り起こして、先生は、そこに埋もれている意味を取り出してくれたのです。—君たちのやっていることはこんなにも価値があり、「意味」があるのだと、子どもたちの目の前に置いて伝えているといってもよいでしょう。こうして子どもは、自分が「存在している」こと、もう「見えない」無名の塵芥ではないこと、**言葉をもち、価値ある行為を行う人間、傾聴され、尊重されるべき存在、つまりは価値として、そこにいるということを発見する**のです。

「レッジョ・エミリアと対話しながら」

カリア・リナルディ 2019年



18

心のスイッチ 東井義男

人間の目は ふしぎな 目

見ようという心がなかったら 見ている 見えない

人間の耳はふしぎな耳

聞こうという心がなかったら 聞いている 聞こえない

頭も そうだ はじめから よい頭 わるい頭の 区別が あるのではないようだ
「よし、やるぞ！」と

心のスイッチが入ると

頭も 素晴らしいはたらきを始める

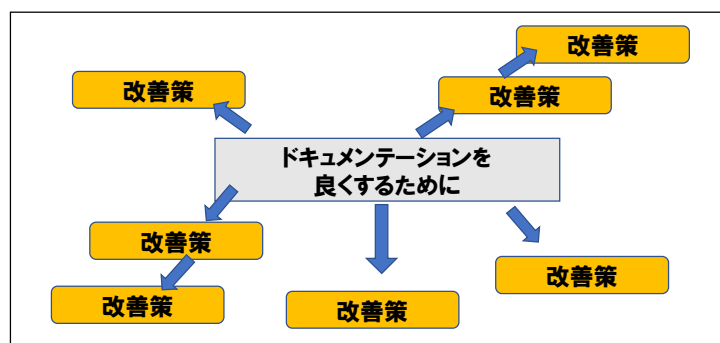
心のスイッチが 人間をつまらなくもし すばらしくもしていく

電灯のスイッチが 家の中を明るくし 暗くもすように

19

4. 自分のドキュメンテーションを 更により良くするために

- ・自分なりにドキュメンテーションを更に良く
する方策をWEB図で書きだしましょう。



20

自分は 自分の主人公
世界でただひとりの 自分を創っていく責任者
自分をのりこえては
もっと大きい自分を創っていく
もっと豊かな自分を創っていく
もっと強い自分を創っていく
もっと確かな自分を創っていく
もっと深い自分を創っていく
自分を創るのは 自分以外ないのだから
人生は ほんとうの私に めぐりあうための旅
東井義男 『人生の詩』より